

21 世紀にキリストを生きる

「声なき者の友」の輪 柳沢 美登里 「祈りの通信」

第17号 (2016年12月)

<「神の国」のパラドックス：大飢饉から30年のエチオピア>

<エチオピア激変中！>

「声なき者の友」の輪をスタートして6年。理念を共有する設立当初からのパートナーの一つがエチオピアの団体ハーベストで、代表はデメレシュさん。彼はエチオピアの様々なキリスト教会から信望が厚く、良き助言者、また研修提供者として多忙な日を送る。協力する私たちへの連絡もめったに来ないほどだ。こちらもパートナーだったことを忘れそうになる！?

昨秋、デメレシュさんから突然、「20年来、祈っていた『民を主の弟子とする』ビジョンに、近づく最高の機会が与えられた。ぜひ、協力してほしい。」と依頼メールが飛び込んできた。これほどの内容を伝えることができる人だったんだ!?と驚くほど、次世代の可能性への彼の興奮が伝わるものだった。「声なき者の友」の輪チームで祈り、この依頼に協力することになった。

どのようにこの働きが進捗し、今のエチオピアで神が何をなされているのかを見聞きするため、10月に私はエチオピアを訪問した。

ご存知のようにエチオピアは30年以上前の大飢饉で100万人

の犠牲者を出した痛ましい記憶が今も残る国だ。20世後半、「極貧の国」といえば、すぐ思い浮かぶ国の一つだった。

今、そのエチオピアの首都は、高層ビル・マンションが次々に建設され、郊外が拡張され、昨年末には電車も動き始めていた。



その一方、通りの裏や街はずれにはスラムが散在し、世界を覆う「格差」がエチオピア社会にも浸透していることを痛感した。(写真下)



30年前、食料も行きわたらざどん底だったエチオピア。今、立ち上がったエチオピアの人々

を通して、神は何をされているのだろう。首都アジスアベバの変貌ぶりと新たな「格差」を目にしなが、思いを深めた。

<国の未来を見つめるデメレシュさんの要請>

デメレシュさんは幼い時に父を亡くし、小学生の70年代、靴もサンダルも買えず、素足で学校に通う極貧を味わった。大学生時代、真実の神を聖書に見出す。それは、大飢饉と共産主義の統制、弾圧が最も激しい患難の時代だった。

50歳になるデメレシュさんは今に至る信仰の原点を、こう証ししてくれた。「あの時代、明日のいのちは判らなかつた。摘発されたら銃殺だった。でも、地下教会の集いは止めなかつた。生ける神を信じて必死に生きた。あの時、僕たちは神の究極の力とご計画を信じ、いのちをかけて従う生き方を培われたのだ。」

彼は、若い時にイエスにある生き方を、実践を通して身につける大切さを体験していた。そこで昨年、協力を要請したのだ。「エチオピアでは、大学生が年々増え、キリスト者学生も増えている。彼らが、自分と他者はイエスの命によってどれほど貴いとされたかという知識を深

めると同時に、それを実践して生きていける訓練をして欲しいと、学生サポート・グループ

(エチオピア K GK) から依頼された。社会の様々な分野に出ていく学生がこの視点での実践を身につけたら、未来には腐

銃殺だった・・・
あの時、僕たちは神の究極の力とご計画を信じ、いのちをかけて従う姿勢を養われた。

敗でなく正義が、妬みや憎しみでなく隣人愛が広がるだろう。今まで忠実に応援してくれたあなたたちに、ぜひ、協力してほしい。」

彼が20年、エチオピアのために祈り願っていた次世代に広がる「神の国」の機会。協力者の一つとして、日本の「声なき者の友」の輪を思い出し、声をかけてくれたのだった。

<大学生に養ってほしいこと>

2016年からエチオピア政府は5年間、大学生倍増計画を進めている。現在48万人の学生を100万人にするものだ。7割の学生に、理科系を専攻させる構想だそうだ。「技術でこそ、国は発展するだろう。」20世紀に飛躍的経済発展を遂げた国々を吟味し、高等教育では技術、特にITなどの先進技術を身につけさせ、国の経済力を高めたいと成功例に倣う政府の選択らしい。

デメレシュさんが私に紹介してくれたエチオピアの学生サポート・グループのスタッフたちは、エチオピア全土の地図を前にしながら、エチオピアの学生が未来のエチオピアに及ぼす可

能性にワクワクし、その一人ひとりが宝石のように磨かれるため、伴走役になろうと情熱を傾けていた。

彼らは、社会のあらゆる分野や霊性、知性、身体、社会性の統合である人に、主権を持つのは神だという生き

方を聖書から見出すように励ます。彼らが、これからのエチオピア社会に欠かせないと到達した確信が、学生たちが社会の弱い立場の「声なき者」たちを視野に入れて、どの専門分野からも社会に貢献しようと、自ら隣人愛を生きていくことだった。



エチオピア社会で数%の大卒は人々からエリート層とみられ、多くの場合、高給を約束される職種や役職に就く。卒業生たちが、自らの手を差し伸べて最も弱い人々に関わることを当たり前前に生き、彼らを支える社会構築に貢献するなら、どれほどエチオピアの未来は主イエスにあって輝くだろう。そういうビジョンを与えられていた。

豊富な知識、技術、物事を深く理解する力などを最高レベルで身につける能力を与えられた大学生たちに最も養ってほしい

こと、それは、日々の歩みでのイエスの姿だった。神を自分の人生の主とする生き方と、自ら隣人愛を実践し、「声なき者」が支えられる社会構築に自分の専門、職種で貢献する。

神は、このタイミングで私たちを協力の輪につなげてくださり「すべての民を私の弟子にきなさい」という主イエスの言葉の一端に、新たな可能性が開かれたエチオピアで関わる恵みを与えてくださっていた。

<「宗教改革」エチオピア改訂版に導かれた次世代>

エチオピアの主要宗教はエチオピア正教会。北部エチオピアは4世紀以来、初期のキリスト教国家の一つだった。13世紀後半からエチオピア正教会は国家宗教になり、王政が倒される1974年まで続いた。現在も人口の約40%が、正教会に所属する。

デメレシュさんが長年関わり、理念をメンタリングしてきた一人の人物にぜひ会ってほしいと紹介されたのが、39歳になるベザレムさん。幼少時から高校まで熱心なエチオピア正教徒だったそうだ。

彼の人生の証しは、この時代のエチオピアに神が建てられた次世代の一人であることを深く感じさせるものだった。

大飢饉が少し沈静化した90年代初めに高校生になった彼は、エチオピア正教の神髄を究めようと正教の教えや儀式に関わる書物に飽きたらず、聖書を数人の友人と読み始めた。エチオピア正教会の礼拝では、聖書を説

き明かすという時間はあまりなく、数百年の継続の結果、普通の人にはほとんど意味が理解できなくなった儀式参加に集約されていた。キリスト教の原点は聖書だと思い、読み始めた彼は目から鱗が落ちるような衝撃を覚えたという。自分の熱心さが見当違いの方向に向いていると、愕然としたようだ。医学部に進学する一方、さらに聖書の学びを深め、正教会の司祭たちと議論を続けた。そして、ベザレムさんは「イエスが教え、生き、いのちを与え、復活されたすべてで伝えられたことは儀式でなく、生き方だった」という結論に達した。そのころデメレシュさんに出会い、「生き方」としてのキリスト教、礼拝と隣人愛の共同体を模索し始めたようだ。

祈りに祈って「聖書を土台とする共同体」形成が心から離れず、主に突き動かされて、十数年前、聖書を土台にし、小グループでの交わりと年に数回の隣人愛を継続的に行う新たな信仰共同体を始めた。同じ思いにたどり着いた同世代の若者と共に数十人で始めた集まりは、今、正教会にもなじみあるいくつかの儀式を取り入れた礼拝と隣人愛グループという数百人規模の集会に成長している。アジスアベバに16、地方でも、ベザレムさんと同じ思いを与えられた正教会の若い世代の司祭たちが率いる集会が正教会からこの群に移り、300近くに上るといふ。

ベザレムさんは「聖書に基づいたエチオピア版の宗教改革か

な。」と総括した。聖書に立ち返るなら、イエスの生きざまの全体像を見失うわけにはいかないと彼は語った。イエスの手足である「体」としての信仰共同体には、実践としての隣人愛が不可欠、というのがデメレシュさんのメンタリングで磨きがかかったベザレムさんの信念だ（写真：小グループや立ち上げた教会 NGO で、メンバーたちが関わり支えてきたストリートチルドレンたちの写真の前で）。



デメレシュさんとベザレムさんは、さらに聖書に基づく信仰共同体に求められている、この時代のエチオピアに託されているテーマを次のように語った。

「エチオピアの福音派と呼ばれるキリスト者は、25年前、5%に過ぎなかった。現在22%にまで増えている。なぜ、聖書に従うクリスチャンをここまで神は増やされたのか。もちろん、神の深遠なご計画だよ。それを見極めるのが、この時代に立てられた僕たちの役割だね。

エチオピアは「アフリカの角」地方の一画を形成している。この地域は、ソマリア、数年前に独立した南スーダン、北にスーダン、エチオピアから独立したエリトリアと、紛争地域が溢れている。エチオピアで聖書に従い、イエスを信じる者たちが増やされたのは『平和をつくる者』として派遣されるためだと信じるよ。僕たちとコンタクトを取っている人たちで、その地域や国境沿いにすでに赴いた人たちもいるよ。僕たちもこの理念をもって関わり続ける。」危険では？「イエス様が僕たち小さな一人のために命をかけてくださったんだ。イエス様がリスクを取って生きたのだから、ぼくたち、イエスの体に属する者がそう歩まなかったら、誰がイエス様の愛の大きさを見、経験して理解してくれるだろう？」そう答えが戻ってきた。

ベザレムさんが目指すのは、聖書が語る神の言葉を自分の生き方とし、その生き方を日々、吟味して歩むというものだった。

2017年の来年、ヨーロッパ発の「宗教改革」500年を迎える。16世紀の欧州で、論理展開の「正当性」の応酬に明け暮れて、置き去りにされてしまった「復活にいたるまでのイエスの生き

「宗教改革」500年・・・置き去りにされてしまった・・・「声なき者の友」となることを包含した「宗教改革・改訂版」

ざますべて」、そして社会の「声なき者の友」となることを包含した「宗教改革・エチオピア改

訂版」が進行していることを思わされた。

ベザレムさんと別れた後、デメレシュさんが言った。「彼にアフリカ角地方の責任を持ってもらおうと思っている。」なるほど。「アフリカ角地方」に、ベザレムさんの卓越した組織運営力が次世代の間で欠かせない、と判断したのだろう。自分の賜物をネットワーク力と見きわめるデメレシュさんは、私の滞在中に発令された「緊急事態宣言」の数か月以上前から、強権的になっている現エチオピア政権に対して、福音派が団結して声明文を出すために、陰で人をつなぐ尽力を重ねていた。自分と人の賜物を見きわめ、若い世代の前でも謙虚に自分を位置づけ、重責を譲り、自分の賜物でやるべきことを肅々と行うデメレシュさんの姿に心から感動し、聖書の原点に戻って人を育てるデメレシュさんを立て、用いておられる神を崇めた。

イスラエルの民との関係で、エジプトと並んでしばしば旧約聖書に登場してきたエチオピアの民。「使徒言行録」には、迫害で散らされたフィリポが主に遣わされ、神を信じるエチオピア高官にイザヤ書から救い主を、説き明かしたと記されている。それ以来、エチオピアで主イエ

スを信じる民を神は起こし続け、人を整えられながら、今のときを待っておられたのだと思えた。

＜「後の人が先になる」神の国は、現代も進行中＞

2016年の世界を振り返ると、「私が安心して暮らせる国を守らなければ」という選択が席卷したように思える。戦争を繰り返してきたヨーロッパで、EUとして個人のいのちと尊厳を第一にする聖書の価値観の基に、国境という壁を取り払い、人も経済も自由に行き来するという壮大な試みを進展させてきた。域外シリアからの大量難民受け入れという事態に、誰のいのちと尊厳を第一とするのか、という問いかけに揺さぶられているように見える。日本社会はヨーロッパより閉じた社会を形成してきたので、そのようなことを討論する前段階にも到達していないのだが・・・。

世界が揺さぶられた2016年、エチオピアでは聖書に基づきイエス様に従おうとする次世代キリスト者が、政府の力によってではなく、「普通の人」として国境を越えて「平和と和解の使者」の役割を担い始める姿に出会わせていただいた。

いのちの保証も食料もないどん底の30年前。援助され祈られて、エチオピアの聖書を生きようとする次世代が今、国境を越

えた「声なき他者」のために立ち上がっている。

私は、彼らの姿を見ながら、豊かに溢れる社会に安住することなく、イエス様のようにリスクを取り、他者のために国境を越えて平和を作ろうとする人々を輩出する社会を願い、またそう生きるように次世代を励ますことを、神が語りかけられる視野に入れていただろうかと問われたように思えた。

「後の人が先になる。」神の国の原則を思いださずにいられない。目に見えるものや情報が溢れて本当の生き方が見えなくなるパラドックス（逆説）。

＜お祈りください＞

- エチオピアで立ち上がる次世代、そして日本でも主が備えておられる次世代が共に、主の導きで、21世紀の世界の平和に貢献できますように。

謀略に満ちたローマ帝国支配下のユダヤで、残虐なヘロデ王の時代にお生まれになったイエス様を思いめぐらす季節に、イエス様がいのちをかけて伝えた「神の国」の深さを思い、そのために今も進む神の業に皆さまと共に参加する恵みを思いつつ。この一年も、お祈り、ご支援をありがとうございました。

2016年12月8日
柳沢 美登里

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、お祈り、ご支援をよろしく願います。活動報告は随時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。「柳沢支援」は右記へ願います。 郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201